クラブ・サークル訪問 第6回

茶道部

岡倉天心が『茶の本』を著したように藝大と茶道には深い結びつきがある。「茶道部」は八十年以上の歴史と伝統をもち部員たちはそれぞれに違った目的意識を持ちつつお点前の緊張と、一服の美味しさを今日も楽しむ。

「形」を覚え、「形」にそって動く

高場泉穂

私たち東京藝術大学裏千家茶道部は、現在部員が二十七名（うち男性四名、女性二十三名）で、藝大のさまざまな学科、学年の生徒とほかの大学の数人の生徒からなっています。主な活動は、毎週金曜の稽古と年に数回の茶会で、部員それぞれが個々のペースで自由に参加できるような形をとっています。

今から約八十年前、藝大の前身である東京美術学校に茶道部は生まれました。当時の学長、正木直彦先生の日記『十三松堂日記』には、一九二五（大正十四）年六月六日、「学校生徒茶道部」の発会式が行われたことが記してあるそうです。こうして大学初の茶道部が藝大にできたのも、『茶の本』を著した岡倉天心が創設した学校であること、古代裂や陶磁器の研究に先鞭をつけた人物である今泉雄作が前年に茶道具に関する講義をしていたこと、茶道具に触れる

練習風景

2007年の初釜

機会が学生に与えられていたことなど、さまざまな面から考えて納得できることだといえます。その後、戦時中に活動が難しくなったり、東京美術学校が東京藝術大学へと変わる際に途切れてしまったりとさまざまな困難はあったようですが、その都度、部は何とか再興され今日に至っています。

上記の通り、長い歴史と伝統を持つ藝大茶道部ですが、私たちは何か特別なことをしているわけではありません。いたってシンプルに、ただお茶の稽古をしているだけです。

入部するとまずお茶の飲み方を練習し、そこから道具の扱い方、お点前の仕方、立ち振舞い、と茶道にまつわるさまざまなことを少しずつ覚えていきます。もちろん個人差はありますが、一年もすれば簡単なお点前はできるようになります。厳格に決められた「形」を覚え、その「形」にそって動くことは、傍目からみればくだらないことのように思えるかもしれませんが、「形」は自由に動く余地を残しているように私は思います。決められた同じ動作をするにもかかわらず、いや同じ動作をするからこそ、そこに差異が生まれ個性が見えてくるのです。また、その決められた動作は、ふだん感じることのない緊張を身体に要求します。背筋を伸ばし、丹田に力を入れ、集中すること。これは、茶道のみならず、私たち藝大生が従事している芸術活動にも、またふだんの生活にも活かせるものだと思います。

同じ茶道部とはいえ、部員はみな茶道をしている理由も意識の持ちようもそれぞれ違っているでしょう。ですから、個々がそれぞれに違った目的意識を持ちつつも、協力し、楽しく活動していけたらと考えています。そしてそこで得たものをみんなが日々の生活に少しでも活かせれば、それに越したことはありません。

人が点てたお茶は大変美味しいものです。毎週金曜日の夜、学生会館の和室で稽古をしていますので、興味を持った方は気軽に足を運び、茶を一服飲んでみてください。

（たかば・みずほ／美術学部芸術学科四年・茶道部副部長）